3
大書
小国 229

教育學部
資料室

文部省検定済教科書

重松鷹泰 監修

白い雲

しょうがくこくご

二年上

小KC
078

60350
教科書文庫
6
810
74-1950
01304
49885

昭和25年8月12日 文部省検定済 小学校国語科用

寄贈

白い雲

しょうがく こくご 二年上

廣島大學
教育學部圖書

大阪書籍株式会社

中央図書館

広島大学図書
0130449885

もくろく

一　あたらしい　きょうしつ
(一)　みんなが　よんで　いる……4
(二)　あたらしい　きょうしつ……9
(三)　まりなげ……15

二　とけい
(一)　とけい……17
(二)　ふるい　とけいの　はなし……27
(三)　ことばあそび……37

三　田うえ
(一)　さくらの　木の　下……46
(二)　牛……47
(三)　田うえ……48
(四)　子がえると　いね……58

四　白い　雲
(一)　ゆうだち……64
(二)　あり……68
(三)　あさがお……70
(四)　水でっぽう……75
(五)　白い　雲……80

五　なつやすみ
(一)　きよしさんの　えにっき……86
(二)　なつやすみの　おはなしかい……92

六　海を　わたる　つばめ……100

七　わたくしの　けいこ……116

あたらしい　ことば
五十おん
かんじ

一　あたらしい　きょうしつ

(一)　みんなが　よんで　いる

一

きよし「いこう。」

ひでお「いこう。」

みんな「学校へ　いこう。」

あいこ「きょうから。」

おとこ「ぼくたちは　二年生。」

みんな

おんな「私たちも　二年生。」

みんな

おとこ「ラン　ラン　ラン。」

みんな

おんな「ラン　ラン　ラン。」

みんな

みちこ「さらさら、小川。」

としお「すいすい、めだか。」

かずお「ぴちぴち、こぶな。」

きみこ「ちかちか、くさの　つゆ。」

まさこ「きらきら、木のは。」

おとこ「光る。」

みんな

おんな「光る。」

みんな

みんな「あさ日に　光る。」

あいこ「ながれる。
みちこ「ながれる。」
みんな「白い くもが ながれる。」
としお「そよそよ。」
かずお「そよそよ。」
みんな「はるかぜ そよそよ。」

2

おとこ みんな「ラン ラン ラン。」
おんな みんな「ラン ラン ラン。」
きよし「そろって いこう。」

ひでお「あしを そろえて
いこう。」
きみこ「ピーチク。」
まさこ「ピーチク。」
みんな「ひばりが あがる。」
きみこ「あがる。」
まさこ「あがる。」
おとこ みんな「うたおう。」
おんな みんな「うたおう。」
みんな「はるの うたを。」

きよし「いこう。」
ひでお「いこう。」
みんな「手を　つないで　いこう。」
あいこ「まって　いる。」
みちこ「まって　いる。」
みんな「あたらしい　きょうしつが。」
としお「よんで　いる。」
かずお「よんで　いる。」
みんな「みんなが　よんで　いる。」

(二)　あたらしい　きょうしつ

げたばこで、うわぐつに　はき
かえると、いそいで、あたらしい
きょうしつへ　いきました。
ぼくも　あいこさんも、うっか
りして、もと　いた　一年生の
きょうしつへ　いきかけました。
「あっ、ちがう。」
と、ふたりは　かおを　見あわせて、わらいながら　ひ
きかえしました。

二年生の きょうしつは、右かどの へやです。戸を
あけると、まだ だれも きて いません。つくえも、
こしかけも、一年生の ときより たかいようです。
あいこさんと ふたりで まどを あけました。
すずしい あさの かぜが はいって きました。
まどの 下には、チューリップの 花が さいて い
ました。
うしろの こくばんを 見ると、
「あたらしい きょうしつを、みんなで、きれいに し
ましょう。この こくばんに、えでも ぶんでも、み

なさんの すきな ことを かいて ください。」
と、かいて ありました。
あいこさんと、なにを かこうか そうだんしました。
学校へ くる とちゅう、
ちょうちょが とんで い
るのを 見たので、それを
かくことに しました。
あいこさんが、白い
チョークで ぶんを かき
ました。

ひらひら　ひらひら、
どこまで　いくの、
ちょうちょさん。
なの　花ばたけは
ここですよ。

ぼくが、その　あとに、き
いろい　チョークで、ちょう
ちょと　なの　花の　えを
かきました。

その　とき、先生が　はいって　いらっしゃいました。

「先生、おはようございます。」

と、あいこさんも　ぼくも、大きな　声で　あいさつを
しました。

先生は　にこにこして、

「おはよう。

やあ、じょうずに　かけましたね。」

と、ほめて　くださいました。

そこへ、としおさんも　みちこさんも　きました。

ちょうちょ、ちょうちょ、
なの　はに　とまれ。
なの　はが　あいたら、
さくらに　とまれ。

と、みんなが　いつのまにか
うたいだしました。

(三)　まりなげ

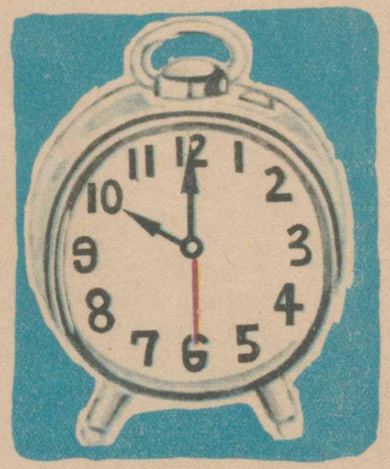
まりなげ

ひでちゃんの　なげた
まりが、ヒューと
とんで　きた。
ぼくは、ポーンと　手で　うけとめた。
みんなが、
「やあ。」
と　いって、ぼくの　かおを　見た。
ぼくは、むねが　すうっと　した。

おにごっこ

一ばん　はじめは、先生が　おにだ。
みんな　わらいながら　にげまわる。
先生も　わらいながら　おいかける。
としおさんが　つかまった。
大きな　先生と　小さな　としおさんが、手を　つな"いで　おいかける。まさこさんが　つかまりそうに　なっ"た。まさこさんは　まっかな　かおを　して、いっしょ"うけんめい　にげる。

二　とけい



(一)　とけい

きのう、私は　とけいを　つ"くりました。
あつがみの　上に　さらを　のせて、まるを　かきました。
その　まるを　十二に　わけて、しるしを　つけました。
はりを　つくろうと　おもって、ちゃだんすの　上の

とけいを　よく　見ると、みじかい　はりと　長い　は"りの　ほかに、すこしも　うごかない　ほそい　はりがあります。おかあさんに　おききすると、

「それは　めざましの　はりです。」

と、おしえて　くださいました。

あつがみを　きって、長い　はりと　みじかい　はり"を　つくりました。ほそい　はりは、にいさんが　はり"がねで　つくって　くださいました。

はりを　とめる　ときも、にいさんが　てつだって　く"ださいました。長い　足の　二本　ある　ぴんを、あつ"

がみに　さし、うらで　その足を　まげて、はりが　よくまわるように　しました。

できあがってから、私は、なんども　はりを　まわしてみました。あつがみの　とけ"いでも、カッチ　カッチといって　いるような　きがしました。

○

けさ、学校へ いくと、かずおさんも きよしさんも、みちこさんも ほかの 人も、とけいを つくって きて いました。いろいろな とけいが ありました。

先生は、かずおさんの とけいを おとりあげに なって、

「この とけいの はりが こう なると、いくつ なりますか。」

と、おききに なりました。かずおさんは、

「はい、『ボン ボン ボン ボン ボン ボン』と

六つ なります。」

と、こたえました。先生が、

「それは、なんじの ことですか。」

と おききに なりました。かずおさんは、

「はい、六じです。」

と こたえました。

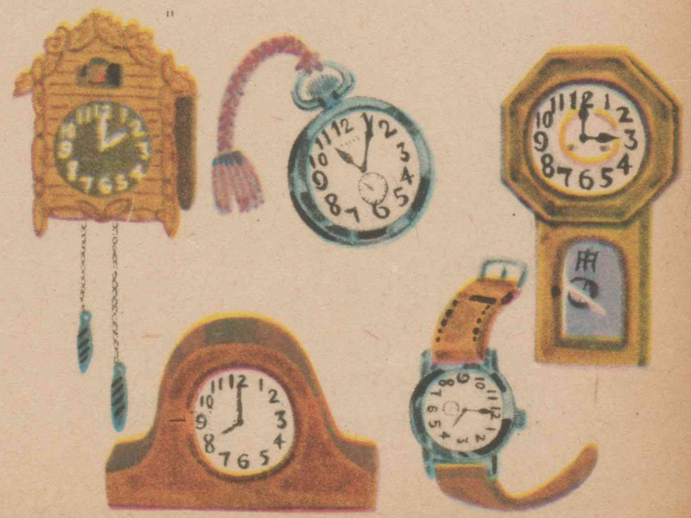
「どの とけいも『ボン ボン』と なりますか。」

と、先生が おききに なりました。

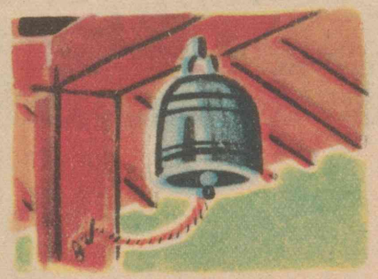
「いいえ、まだ あります。」

と、みんなが 手を あげました。

先生は、きよしさんを　おさしに
なりました。きよしさんは、
「ぼくの　うちの　とけいは、『チン
チン　チン』と　なります。」
と　いいました。みちこさんは、
「私の　うちのは、『ポッポー　ポッ
ポー』と、はとが　なきます。」
と　いいましたので、みんな　びっ
くりしました。
先生は、私を　おさしに　なりました。私は、こまっ
て　しまいました。めざましどけいは　ならないからで
す。
「私の　うちのは　なりません。」
と　こたえますと、先生は、
「そうですね。ならない　とけいも　あります。でも、
あいこさんの　とけいは、めざましどけいのようです
から、きめた　じこくに　なると、なるでしょう。」
と　おっしゃいました。
「はい、六じなら　六じの　ところに　この　はりを
まわして　おくと、その　じこくに『リリリリ』と



なります。」
と いいました。
先生が、
「とけいは、はりで じこくを しらせる ほかに、
ボン ボン ボン、チン チン チン、ポッポー、
リリリリ などと、音を たてて、じこくを しらせて くれます。」
と おっしゃいました。
○
先生は、



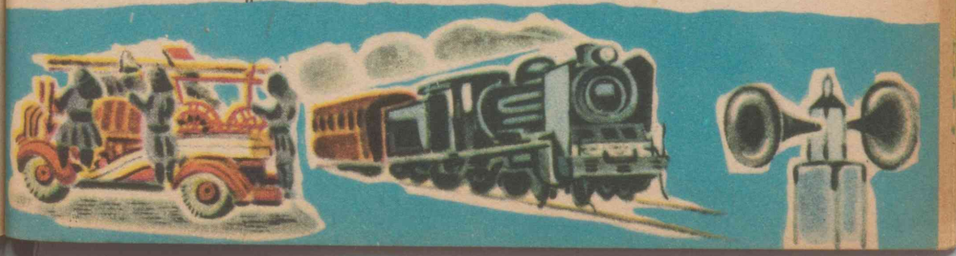
「とけいの ほかにも、音で 私たちに、いろいろな ことを しらせて いるものが あります。どんな ものが あるでしょう。」
と、おききに なりました。
みんなで いろいろ はなしあいました。
「かねは 『カラン カラン』と なって、学校の はじまりを しらせます。」
「サイレンは 『ウーウーウーウー』と なって、おひるを しらせます。」

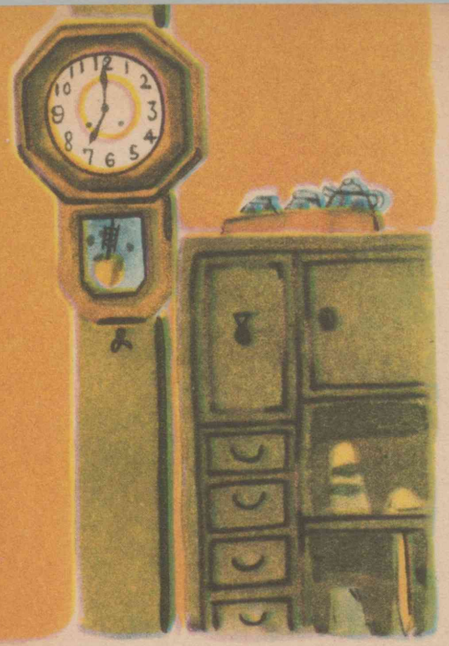
「しょうぼうじどうしゃの サイレンも、『ウーウーウー』と なりますが、これは かじを しらせます。」

「バスは『ブウブウ』と いって、みちを とおして くださいと いいます。」

「きかんしゃは『ポー』と いって はしりだします。」

いろいろな 音が、たくさんの ことを しらせて いる ことが わかりました。





(二) ふるい とけいの はなし

私は、きよしさんの うちの はしらに かかって いる、ふるい とけいです。

ある とき、おかあさんが、きよしさんや ようこさんに、こう おっしゃいました。

「この とけいは、おとうさんの 子どもの ときから、あるのだそうです。ですから、この うちの できごとは、なんでも しって いるのです。」

私は、じょうぶな　きかいで　できて　いるので、いままで　やすみなしに　はたらきつづけて　きました。それで、おかあさんの　おっしゃるとおり、この　うちの　できごとは　いろいろ　しって　います。

きよしさんの　生まれたのは、よあけがたで、私が四じを　うった　ときでした。

ようこさんが　生まれたのは、よなかで、十一じ十五ふんを　さした　ときでした。

それから　私は、ふたりの　大きく　なるのを、ずっと　見て　きました。

きよしさんが　学校へ　いくように　なってから、私は、まいあさ　六じに　なると、ふたりの　まくらもとで、

「おきなさい。おきなさい。」

と　しらせて　あげます。

この　ごろは、ふたりとも、私の　しらせで、すぐ目を　さますように　なりました。

きよしさんが　学校へ　でかける　じこくは、いっそ
う　きを　つけて、しらせて　あげます。
きよしさんが、あまり　ゆっくりして　いる　ときは、
きが　きで　ありません。私は、
「いそぎなさい。いそぎなさい。」
と、よけい　たかい　音を　だすように　します。
この　あいだの　えんそくの　あさでした。
きよしさんは、いつもより、一じかんも　早く　目を
さましました。そうして、

「早く　ごはんに　してよ。」
と　いって、おかあさんを　な
んども　せきたてました。
おかあさんが、
「とけいを　ごらんなさい。ま
だ、いつもより　一じかんも
早いのですよ。」
と　おっしゃっても、きよしさ
んは　じっと　して　おられません。きよしさんが、
「あの　とけい、早く　まわれば　いいのに。」

と　いいますので、私も　こまって　しまいました。

この　あいだの　にちようには、こんな　ことが　あ"りました。

おひるごろ、おかあさんは　きゅうな　ようじで、町"の　しんるいまで、いかなくては　ならなくなりました。

おとうさんは、あさから　るすでした。

それで　おかあさんは、

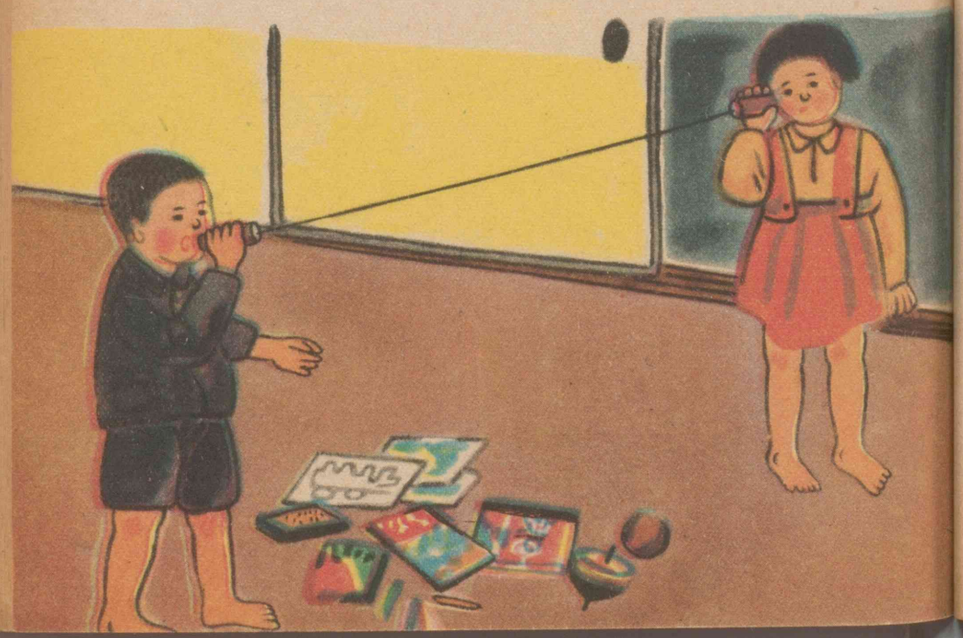
「ふたりで　るすばんを　して　いるのですよ。四じに"は　きっと　かえりますから」。

と　おっしゃって、おでかけになりました。

ふたりは、なかよく　えほん"を　見たり、ぬりえを　したり、でんしゃごっこや、かいものごっ"こを　したりして、あそんでいました。けれども、だんだんする　ことが　なくなりました。

きよしさんが　私を　見て、

「ああ、まだ　二じか」。



と　いいました。
ふたりとも　えんがわに　すわって、だまりこんで
しまいました。私は、
「もう　すこし、もう　すこし」。
と　いいました。
私が　三じを　うつと、ふたりは　きゅうに　げんき
に　なりました。
それから　きよしさんは、なんど　私を　見に　きた
ことでしょう。その　たびに、
「おそいなあ。はりの　うごくのが　おそいなあ」。

と、こごとを　いいました。
三じ三十ぷんに　なると、ふたりは、もう　がまんし
きれなく　なって、門の　外へ　とびだして　いきまし
た。
しばらく　たつと、
「おかあさん」。
と　よぶ、げんきな　声が　きこえました。
私も　ほっと　しました。
ちょうど、四じを　うつ　ところでした。

私に　ねじを　かけて　くれるのは、いつも　おとう
さんです。おとうさんは、子どもの　ときから、にちよ
うの　あさに　なると、わすれないで、ねじを　かけて
くれます。

やがて、きよしさんが、
おとうさんの　したよう
に、ふみだいに　のぼっ
て、ねじを　かけて　く
れる　ことでしょう。

(三)　ことばあそび

あいこさんが、きよしさんの　うちへ　あそびに　き
ました。ふたりは、えんがわで　えを　かきました。
きよしさんは、きしゃが　はしって　いる　ところを
かきました。
あいこさんは、やおやの　みせを　かきました。
やがて、ふたりの　えが　できあがりました。
きよしさんの　おかあさんが、おやつを　もって　きて、
「まあ、あいこさんの　やおや、じょうずですね。」
と　おっしゃいました。

あいこさんは、きまりわるそうに　えを　かくしました。きよしさんの　おかあさんが、

「おや　おや、やおやさんが　みせを　しめて　しまいました。ね。」

と　おっしゃいました。

あいこさんは、その　とき、

「おや　おや、やおや。」と　いう　ことばが、へんに　きこえましたので、

「おや　おや、やおや。あら、やおやは、上から　よんでも　下から　よんでも、やっぱり　やおや　だわ。」

と、ふしぎそうに　いいました。

きよしさんも、

「ほんとうだ。やおや、やおや。これは　おもしろい。上から　よんでも、下から　よんでも　おなじだ。こう　いう　ことばは、ほかにも　ないかな。」

と　いいました。
あいこさんも、じっと　かんがえて　いましたが、
「ある、ある。ほら、きしゃの　きてきよ。下から　よんでも　きてきでしょう。ふたりで、上から　よんでも　下から　よんでも、おなじに　よめる　ことばを、もっと　かんがえましょう」。
と　いいました。きよしさんも、
「よし、やろう。かみに　かいて、きょうそうしようか」。
と　いいました。
おかあさんも、

「おもしろそうですね。おかあさんも、小さい　ときき　しましたよ。あとで、なかまに　いれて　くださいね」。
と、にこにこ　しながら　おっしゃいました。
しばらくして、どちらも　かきおわったので、かわる　がわる　よみあう　ことに

しました。

きよしさんは、大きな　声で　よみました。

やぐや
いたい
しんぶんし
よるいるよ
たけやぶやけた

あいこさんも、くすくす　わらいながら　よみあげました。

した。

みなみ
きつつき
るすきする
だめだ

きよしさんが、

「あいこさんは、じぶんで、『だめだ』なんて　いうんだもの。」

と　いうと、あいこさんは、
「だって、ほかに　なかったのですもの」。
と　いいました。
おかあさんが、
「それでは、おかあさんの　しって　いるのを　いいます
しょうか」。
と　おっしゃって、三つ　おしえて　くださいました。
それは、
みがかぬ　かがみ。
なかざきやの　やきざかな。

ながき　よの　とおの　ねふりの　みな　めざめ
なみのりふねの　おとの　よきかな。
と　いうのでした。
三つめの　うたは、ふるい　うたです。
おかあさんたちが、お正月に　いい　はつゆめを　見るようにと、たからぶねを　つくって、まくらもとに　おき、この　うたを　いいながら　ねたのだそうです。

三　田うえ

（一）　さくらの　木の　下

さくらの　木の　下は
うすぐらい。
はの　しげった　中に、
あかるい　空が
のぞいて　いる。
まっかな　さくらんぼが、
私を　じっと　見て　いる。

（二）　牛

牛が、みちばたの　木に　つながれて、
くさを　たべて　いる。
おを　ふりふり　たべて　いる。
ふとい　足に、わらぐつを　はいて
いる。
目を　ふさいだり　あけたりしながら、
ゆっくり　口を　うごかして　いる。
かおを　うごかさずに　たべて　いる。

(三) 田うえ

にちようの　あさから、ひろしさんの　うちでは、田うえが　はじまりました。

おばあさんと　ひろしさんが　のこっただけで、みんなが　たんぼへ　いきました。

十じごろ、おばあさんが、

「ひろし、たんぼへ　おちゃを　もって　いって　おくれ。」

と　おっしゃいました。

ひろしさんは、大きな　やかんと、おちゃわんや　おかしの　はいった　かごを　さげて、たんぼへ　いきました。

たんぼの　あちらこちらで、大ぜいの　人が　はたらいて　いました。牛や　うまも　はたらいて　いました。

ひろしさんは、あぜみちを　とおって　いきました。

くろい　牛が　すきを　ひいて　いました。

牛は、田の　中を　ぐるぐる　あるきまわって　います。田の　中は　なみだって、白い　あわが　ういています。

牛の　はらあてに　どろ水が　はねかかります。

すきを　もって　いる　おじ"
さんも、はらの　あたりまで、
どろだらけでした。
なえとりを　して　いる　お"
ばさんたちも　ありました。
みんな　たすきを　かけて
います。
かさを　かぶった　おばさん"
も、てぬぐいを　かぶった　お"
ばさんも　います。

いねの　なえを、手に　いっ"
ぱい　にぎって、水で　あらっ"
て　います。
おばさんたちは、小さな　声"
で、うたを　うたって　いまし"
た。
ひろしさんが、小川の　そば"
の　みちを　あるいて　いくと、
かえるが　ぴょん　ぴょん、小"
川へ　とびこみます。

かえるの　すがたは　見えないけれども、ジャボン
ジャボンと　音が　します。まるで　きょうそうのよう
に　とびこみます。
ひろしさんは　おもしろく　なって、わざと　足音を
たてて　あるきました。
土ならしが　すんで、水を　はった　田は、かがみの
ように　光って　います。山が　うすく　うつって　い
ます。白い　くもも　うつって　います。
うえおわった　田は、なえが　きちんと　ぎょうぎよ
く　ならんで、にぎやかに　見えます。

かぜが　ふくと、なえが　いっせいに
そよそよと　ゆれます。
とおくの　田は、うすあおく　か
すんで　見えます。
ひろしさんが、
「おとうさん」
と　よびました。
おとうさんが、
「おーい。」
と、手を　あげました。

おとうさんは、
おかあさんや、
おじいさんや、
さだおくんの
うちの　おじさん
んとならんで、う
えていらっしゃい
ました。
「ひろし　ありが
とう。」

と、おかあさんが　かおを　あげて　おっしゃいました。
さだおくんの　うちの　おじさんも、
「ひろしさん、えらいね。」
と　おっしゃいました。
四人が、よこに　ならんで、うえながら　うしろへ
さがって　いきます。
なえは、ぎょうぎよく　きちんと　ならんで　います。
ところどころに　なえの　たばが　ういて　います。

おとうさんは、じぶんの　手の　中の　なえを　うえおわると、

「さあ、ひとやすみ・しようかね。」

と、みんなに　声を　かけました。

みんなが、つぎつぎに田から　あがって、小川の水で　手を　あらいました。

どての　そばに　まるくなって、おちゃを　のみました。

みんなが　おいしそうに　のんで　いるので、ひろしさんも　うれしく　なりました。

(四) 子がえると いね

田うえの おわった 田の 中です。

子がえるたちが なえの かげに かくれたり、なえの まわりを ぐるぐる にげたり して、おにごっこを して いました。

その うち、一ぴきの子がえるが、下に もぐり

こんだので、うえたばかりの なえは、ぽこりと うきあがって たおれました。

「よわい くさだなあ。」

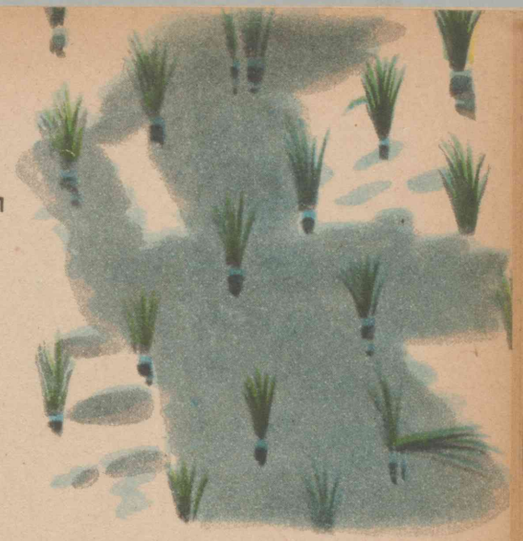
子がえるは、そう いって、たおれた なえを 足で けりました。

そこへ、かえるの おかあさんが やって きました。

「みんなで なにを して いるの。」

と、おかあさんが　たずねました。
「ぼくたち、おにごっこを　して　いるのです。」
「こんなに　くさが　はえたので、おにごっこでも　かくれんぼでも、おもしろくて　たまりません。」
「でも、よわい　くさで、ちょっと　さわったら、あんなに　ぺたんと　たおれました。」
子がえるたちは、かわるがわる　いいました。
おかあさんがえるは、だまって　きいて　いましたが、しずかに　いいました。
「これは、ただの　くさでは　ありませんよ。いねと

いう　ものです。にんげんの　たべる、だいじな　お米が　とれる　くさです。ひとりで　はえたのでは　なくて、にんげんが　わざわざ　うえたのです。うえたばかりだから、さわると　たおれます。いまに　しっかり　ねが　ついたら、おしたって　ついたって、たおれるものですか。」
その　とき、水の　上に、おひゃくしょうさんの　かげが、ゆらゆら　うつりました。
おひゃくしょうさんは、じっと　田の　中を　見わたして　いるようです。



かえるたちは、あわてて　くさむらの　中へ　にげこみました。

かえるたちが　じっと　いきをこらえて　いると、こう　いう　声が　きこえました。

「うまく　ねが　ついたようだ。どうか　いせいよくのびて　おくれ。おや、一かぶ　たおれて　いる。どうしたのかな」。

おひゃくしょうさんは、そっと　田の　中へ　はいって、子がえるの　たおした　なえを、ていねいに　うえなおしました。

おひゃくしょうさんが　いってしまってから、おかあさんがえるは　子がえるたちに　いいました。

「ね、わかったでしょう。だから、いねの　あいだで　あそぶのは、おやめなさいよ。おたまじゃくしたちも　わかりましたね」。

四　白い　雲

(一)　ゆうだち

「ゆうだちが　くるから、ほしものを　いれるのを　てつだって　ください。」と、おかあさんが　おっしゃいました。ぼくは　すぐ　げたを　はいて、外に　出ました。

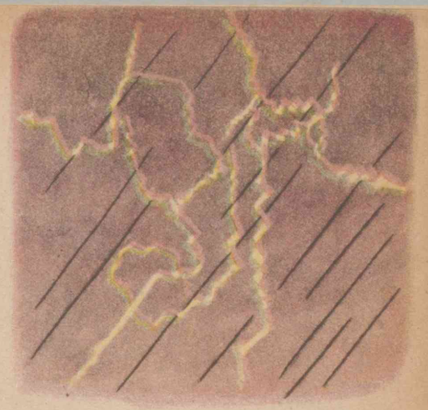
くろい　くもが、空　いっぱいに

ひろがって　います。今まで　じいじい　ないて　いた　せみが、きゅうに　なきやみました。つよい　かぜが　ふいて　きて、きりの　木の　はが　ちぎれて、とびそうに　なります。

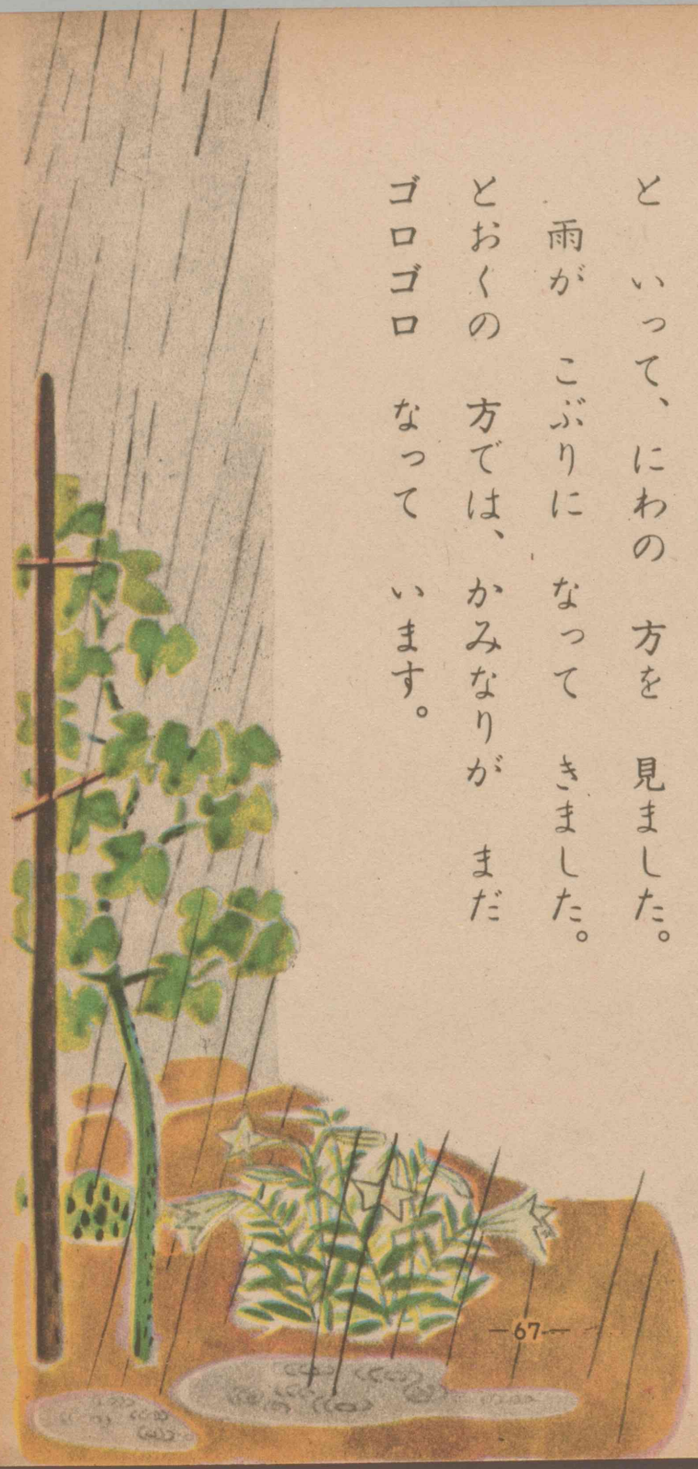
おかあさんと、ほしものを　大いそぎで　とりこみました。

うちの　中が、一どに　くらく　なって　きました。

バラバラ、大つぶの　雨が、ものおきの　トタンやねを　たたきだしました。その　うちに、ザーザーと　さかんに　ふって　きました。



雨に　まじって、ゴロゴロと　かみなりが
なりだしました。ようこは　こわがって、
耳を　おさえて　います。
雨が　いっそう　つよく　なって、えん
がわに　ふきこんで　きました。おかあさんが　ガラス
戸を　おしめに　なりました。
にわの　ゆりは、雨に　うたれて　ゆれて　います。
にわの　中に　小さな　川が　できて、あま水が　な
がれて　いきます。
ラジオが　バリバリ　いって　いるので、ぼくは　ス



イッチを　きりました。
ようこが、
「どんぼや　ちょうちょは、どこに　かくれたのかしら」。
と　いって、にわの　方を　見ました。
雨が　こぶりに　なって　きました。
とおくの　方では、かみなりが　まだ
ゴロゴロ　なって　います。

(二) あり

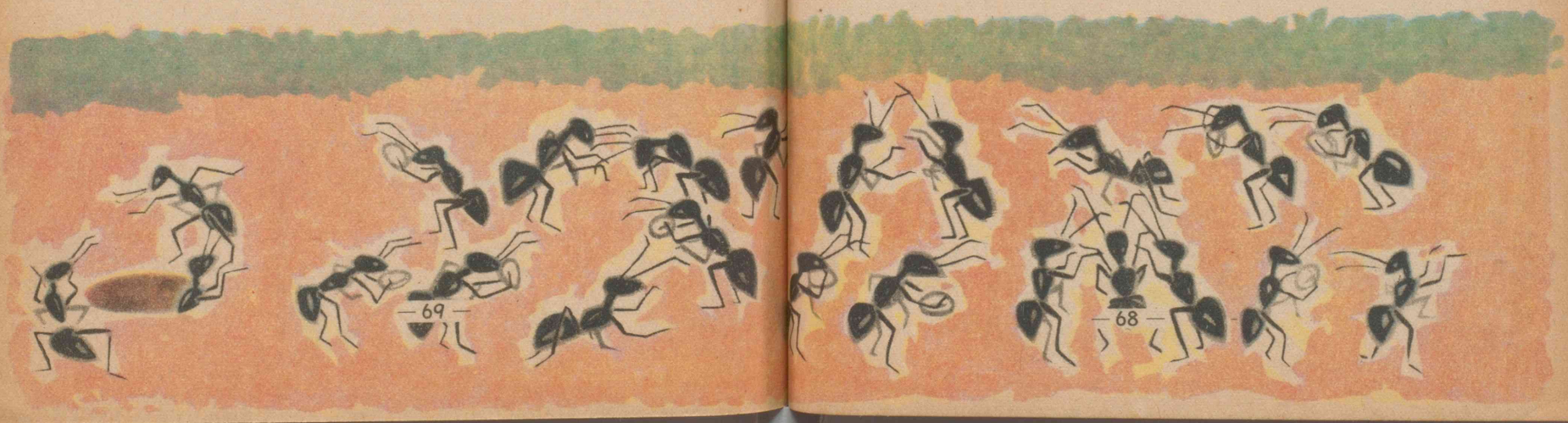
たくさんの ありが、白い 米つぶのような ものを くわえて、はこんで いました。

じっと 見て いると、ひがしの方へ はこんで いくのも あります。

「どこから 出て くるのだろう」。と 見て いると、ありは、みんなにわの すみの あなから 出てきます。そうして、また その へんの あなの 中へ、はいって いきます。

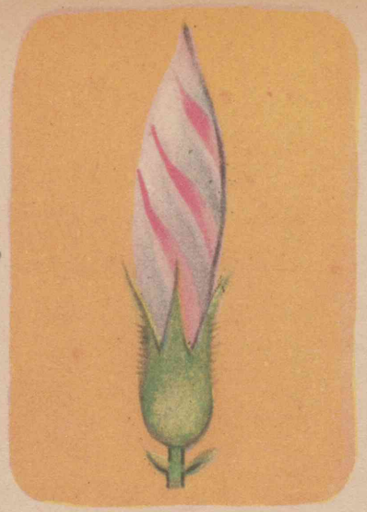
なにも くわえて いない ありも います。

二ひきの ありが、とちゅうで出あうと、ほそい ひげのようなものを うごかして います。なにか おはなしを して いるようです。



ぼくは、ありの　おはなしが　わかったら、おもしろ
いと　思います。

(三)　あさがお



あさがおの　つぼみが、大きく
なりました。あすは、きっと　さく
でしょう。
ゆうはんの　とき、
「ぼくの　あさがお、あす　さきま
すね。あさがおは　なんじ　ごろ　さきますか。」

と、おとうさんに　おききすると、
「四じごろ　さくかな。」
と　おっしゃいました。
「それなら、あす　早く　おきて、さくのを　見よう。」
と　いったら、
「あさがおの　さくのと、きょうそうして　ごらん。」
と、おとうさんが　おっしゃいました。
よる　早く　ねました。
けさ　目を　さまして、すぐ　とびおきたら、もう

あかるく　なって　いました。
とけいは　五じはん　でした。
あさがおは　もう　さいて
いました。
むらさきの　うつくしい　花が　三つ、ぱっと　ひらいて
いました。
あの　ねじれた　つぼみが、
どうして　こんなに　ひらくの
か、ふしぎで　たまりません。

はじめて　さいたので、ぼくは　うれしくて、長い
あいだ　見て　いました。
あさはんの　とき、おとうさんに、
「あさがおより　早かったかね。」
と　きかれました。
「いいえ、ぼくが　おきたら、もう　さいて　いました。」
と　いうと、
「あさがおは　早おきだろう。」
と、おとうさんが　おっしゃいました。
ゆうがた　見たら、あさがおは、三つとも　しおれて

いました。
けれども、あす　さく　つぼみを　かぞえたら、五つも　ありました。
じょろで、水を　たくさん　かけて　やりました。
あすの　あさは、きっと　早く　おきようと　思います。

(四)　水でっぽう

こうさくの　じかんに、水でっぽうの　おはなしが　ありました。うちへ　かえって、すぐ　竹を　さがしました。おかあさんが、つかえなく　なった　竹ぼうきを　だして　くださいました。
えは、かざぐるまの　ぼうを　つかう　ことに　しました。えの　ながさは　三十センチ、つつの　方は　二十五センチに　しようと　思いました。
ようこに　竹を　おさえて　もらって、のこぎりで

きりました。

やっと　きれたので　くみたて"る　ことに　しました。

えの　方は、さきを　すこし　けずって、きれを　まきました。つつに　はめて　みると、ふとかっ"たり　ゆるかったり　しましたが、うまく　できました。

つつの　さきに、きりで　小さ"な　あなを　あけました。

作って　しまうと、うれしくて　たまりません。さっ"そく　バケツに　水を　くんで　きました。水を　いれ"て、ついて　みると、よく　とびます。水でっぽうに水を　いれる　とき、えを　ひくと、水は　ズクズクと音を　たてて、はいって　きます。ようこも　よろこん"で　見て　いました。

いちじくの　ところに　まとを　おいて、五メートルぐらい　はなれた　ところから、ねらいうちを　しまし"た。ザッと　いって　まとに　あたりました。

こんどは　ゆりの　花や、つめきりそうや、あさがお"に　むかって　やりました。花や　はに　水が　ちって、しずくが　たまります。たまった　しずくが　光ります。

それから　松の　木に　かけました。すると、松のはに　かかって　いた　くもの　すが　ぬれて、白く光りました。

ぼくは　おもしろく　なって、いくども　つきました。

ようこにも　かして　やりました。

ようこが　つくと、水は　チリチリと　いって　あま"り　とびません。

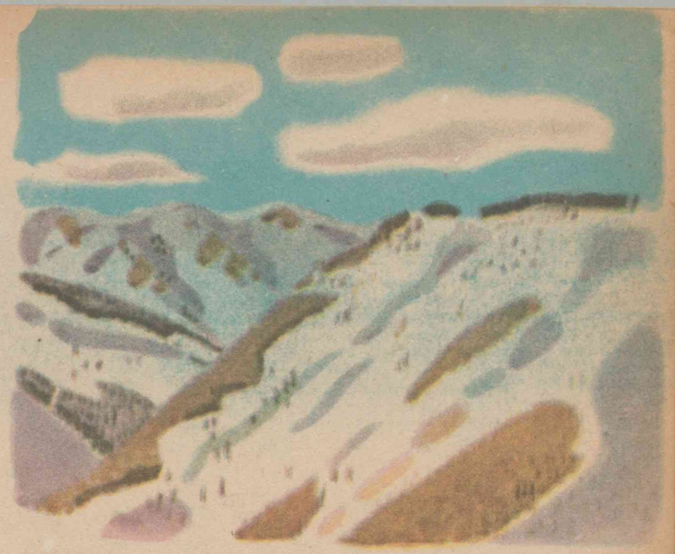
ぼくたちは、また　うえ"木や　花に　かけて　あそ"びました。

(五) 白い 雲

雲は いいね。
あんなに 高い ところを
いったり きたり して、
すきとおるように きれいで、
ほんとうに いいね。
やわらかそうで、
つかめば、雪のように
かたまりそうで、
雲は いいね。

わたがしのようで、
ふわふわして いて いいね。

「あの 雲に、だれか のって
いるようだ。ぼくも のせて
もらいたいなあ。」
と、きよしさんが いいました。
ひでおさんも、
「白い ふねが、うみに うかん
で いるようだ。ぼくも のせ



て もらいたいなあ。」
と いいました。
「雲の ふねで、どこへ つれて
いって もらおうかしら。」
と、あいこさんも いいました。
三人は、白い 雲を 見ながら、
いろいろ かんがえました。

きよしさんの かんがえた こと。
「雲の ふねに のれたら、ぼくは 高い 山へ いく」

のだ。そうして スキーを
して あそぼう。それから、
大きな 雪だるまを 作ろ
う。」

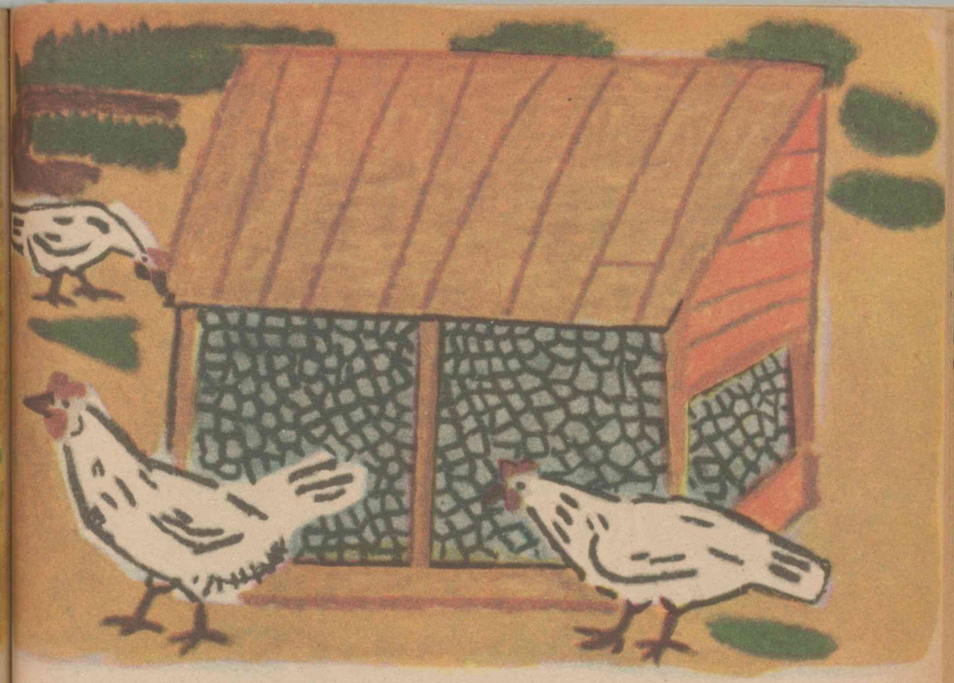
ひでおくんの かんがえた
こと。
「ぼくは うみへ つれて
いって くれと たのもう。
うみに うかんで いる

きせんの　かんぱんに　おりて、みんなを　びっくり
させて　やろう。ふねに　のって　いる　人たちを、
みんな　雲に　のせて　やって、雲の　上で、おにごっ
こや　かくれんぼを　して　あそぼう。」

あいこさんの　かんがえた　こと。

「わたしは、雲の　ふねに　のったら、ひばりが　どこ
まで　あがるか　見て　いるわ。それから、この　あ
いだ　とばした　ふうせんの　あとを、おいかけて
いって　みよう。あまの川を　わたって、おほしさまの

くにへ　いって
みたい。
たなばたの　おま
つりが　あったら、
わたしも　いっしょ
に　たんざくを
作って、おまつり
の　なかまに　い
れて　もらうわ。」



五　なつやすみ

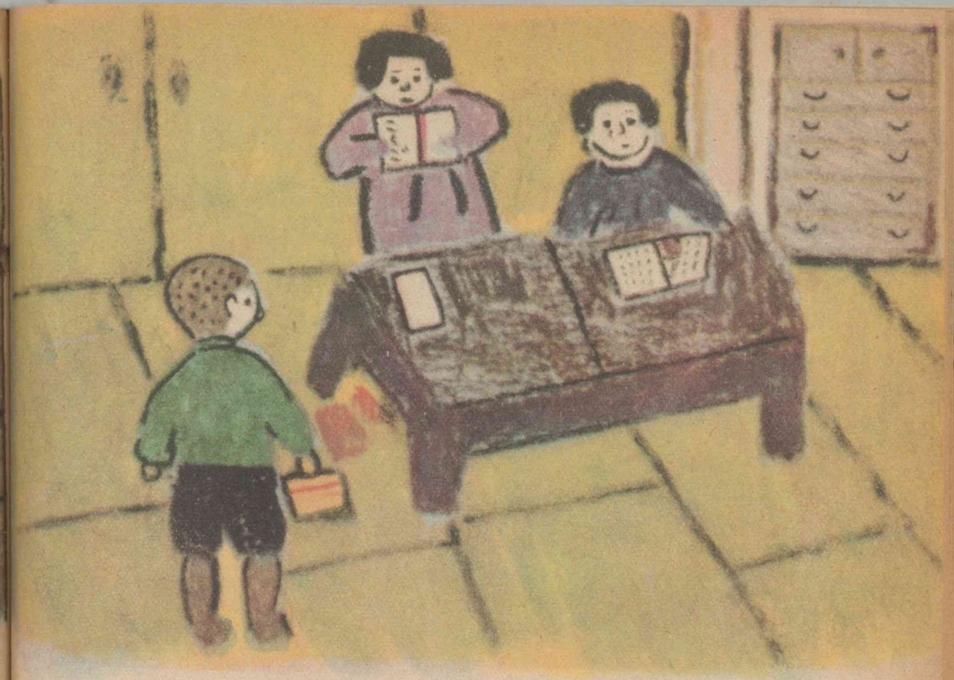
(一)　きよしさんの　えにっき

八月一日　くもり

おとうさんと　とりごやを
作りました。のこぎりで、い"
たを　きったり、くぎを　うつ"
たり、かなあみを　はったり
して　できあがりました。

八月二日　はれ

おかあさんと　はたけへ
なすを　もぎに　いきました。
むらさきいろの　まるい　な"
すが、たくさん　なって　い"
ました。きゅうりの　はに
いる、まるい　ほしの　ある
虫を　とりました。おかあさ"
んが　上の　方、ぼくが　下"
の　方を　とりました。



八月三日　雨

とうきょうの　おじさんが、えみちゃんを　つれて　おいでに　なりました。

おじさんから、え本と　クレヨンを　いただきました。

えみちゃんと、ようこと、ぼくと　三人で、学校ごっこを　しました。

えみちゃんも　二年生です。

八月四日　はれ

げたを　ほしに　いくと、かきねに　せみの　からが　ひっついて　いました。せみの　からは、ちゃいろで　ぴかぴか　光って　いました。

とって　みたら、かるくて　からから　して　いました。

せなかは、二つに　われて　いました。

八月五日　はれ

としおさんと、としおさんの　にいさんと　こうえんへ　いきました。こうえんの　池で、三人が　ボートに　のりました。としおさんの　にいさんが、こいで　ください　ました。ボートは　ゆらゆら　ゆれながら、水の　上を　すすんで　いきました。

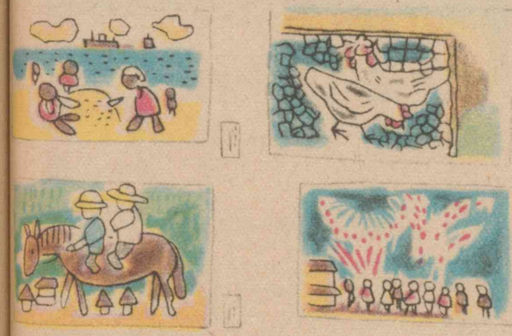
八月六日　はれ

にわの　ひまわりが　ぼくの　せいより　高く　なりました。もう　すぐ　おかあさんの　せいも　こしそうです。大きな　はの　上に、小さな　かまきりが　とまって　いました。きょとんと　した　かおで　こちらを　見て　いました。

(二) なつやすみの おはなしかい

きょうしつに、なつやすみの さくひんが、ならべて あります。

みちこさんの 作った どうぶつえんの もけい、かずおさんの 作った はこにわ、としおさんの 作った 犬ごや、みんなの えに



にっき、いろいろ ならべて あります。あいこさんが海で ひろって きた 貝や 石も、はこに いれて あります。

かべには、きよしさんの うまに のった え、ひでおさんの 水あそびの え、としおさんの にわとりの え、きみこさんの はなびの え などが はって あります。先生が、

「みんな、くろい かおに なりましたね。これから、おはなしかいを しましょう。」

と、おっしゃいました。

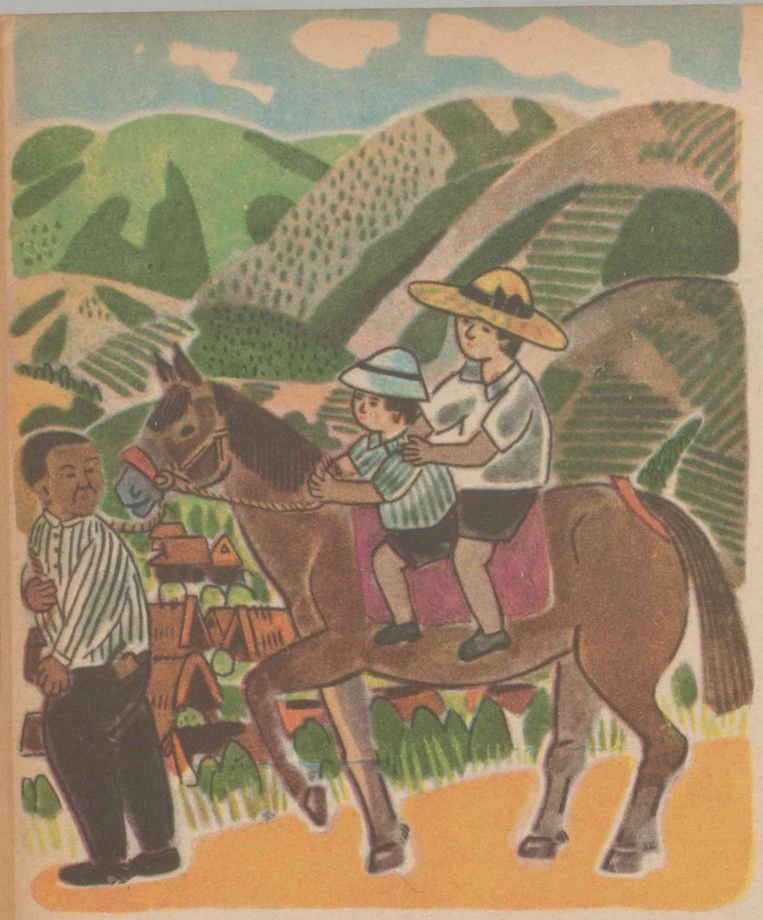
一ばん　さきに　きよしさんが　はなしました。

ぼくは、おかあさんと　赤ちゃんと　きしゃに　のって、山の　おじいさんの　ところへ　いきました。山の　おじいさんの　うちは、まわりが　高い　山です。きりが　うごいて　いくのが　見えます。谷川の　ところで、うぐいすが、

「ホーホケキョ、ケキョ、ケキョ。」

と　ないて　います。

おじいさんの　うちには、うまが　います。



おじさんが　たんぼへ　いく　とき、うまに　のせて　もらいました。

はるおさんが、ぼくの　うしろに　のりました。

うまの　上から　下を　見ると、ずいぶん　高く　見えました。

おとなしい　う

まなので、ゆっくり　あるいて　くれました。
はじめは　こわかったけれども、おわりには、おもしろくて、もっと　のりたいと　おもいました。
たんぼから　かえる　ときは、うまの　せなかに、どっさり　草を　つみました。
かえってから、かいばを　やると、おけの　中に　おを　つっこんで、おいしそうに　たべて　います。
あまり　たくさん　たべるので　びっくり　しました。
耳を　つんと　立てて、きれいな　目を　して　います。
はなの　ところに、白い　ほしが　あります。ぼくは

はなを　なでて　やりました。
つぎは、あいこさんが　はなしました。
私は　にいさんと、おじさんの　うちへ　いきました。
おじさんの　うちは、海の　すぐ　ちかくに　あります。
はまべには　うおを　とる　あみが、あちらにも　こちらにも、ほして　ありました。
りょうしが、船から、あみを　あげて　いました。
私は、おじさんと　いっしょに　海に　はいりました。
私は　まだ　およげないので、おじさんに　手を　もっ

て　もらって、足を　バチャ　バチャ　うごかしました。
大きな　なみが　きた　とき、ガブリと　水を　のん
で　しまいました。うみの　水は　しおからい　あじが
しました。
すなの　上に　ねそべったり、すなの　お山を　作っ
たり、トンネルを　こしらえたり　しました。せっかく
作っても、大なみが　きて、くずして　しまいました。
貝がらが　たくさん　おちて　いたので、きれいなの
を　ひろって　きました。
白い　おさらのような　貝や、つめの　かたちを　し

た　赤い　貝や、かたつ
むりの　ような　貝や、い
ろいろ　ありました。
まっ白な　石や、赤や
みどりの　石も　ひろっ
て　きました。

六　海を　わたる　つばめ

おとうさんつばめが、三ばの　子つばめに　いいました。

「きょうは　いい　てんきだから、町の　方へ　つれていって　あげよう。」

子つばめたちは　よろこんで、おとうさんつばめのあとに　ついて　とびたちました。

村から、のや　はたけを　とおって、はつでんしょのでんせんが　長く　つづいて　います。

「これを　つたって　いくと、にぎやかな　町へ　出るのだ。でも、でんせんに　さわると　あぶないよ。」

と、おとうさんつばめが　いいました。

つばめたちは、その　でんせんを　たよりに　ずんずん　とんで　いきました。

その　うち、つたって　きた　でんせんが、どれだかわからなく　なったと　思う　ころ、むこうの　方に、町の　たてものが　見えて　きました。

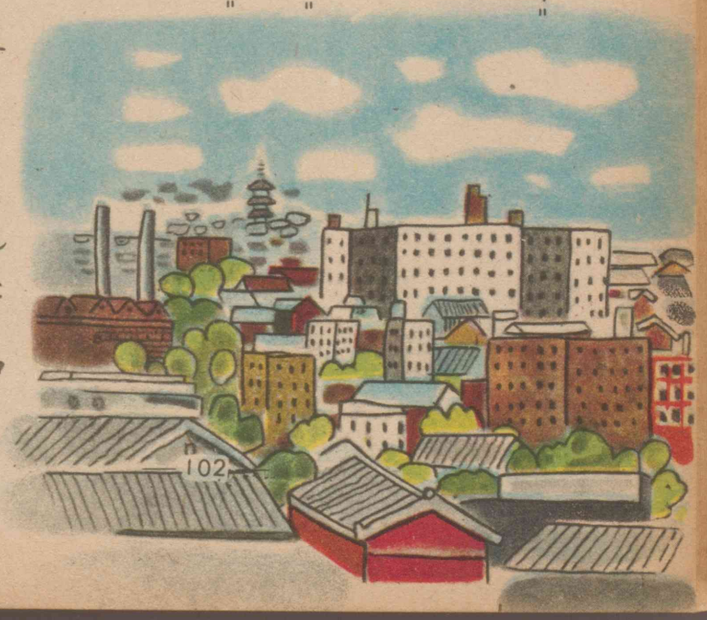
町の　いり口には、こうばが　ありました。

こうばの　高い　えんとつは、くろい　けむりを、もくもく　はいていました。

おとうさんつばめは、このえんとつを　めがけて、ぐんぐん　あがりました。子つばめたちも、そのあとを　ついて　あがりました。

おとうさんつばめは、けむりの　うすく　きれた　中を　つききりました。子つばめたちも、つききりました。

こうえんの　森が　見えました。森の　中には、やね



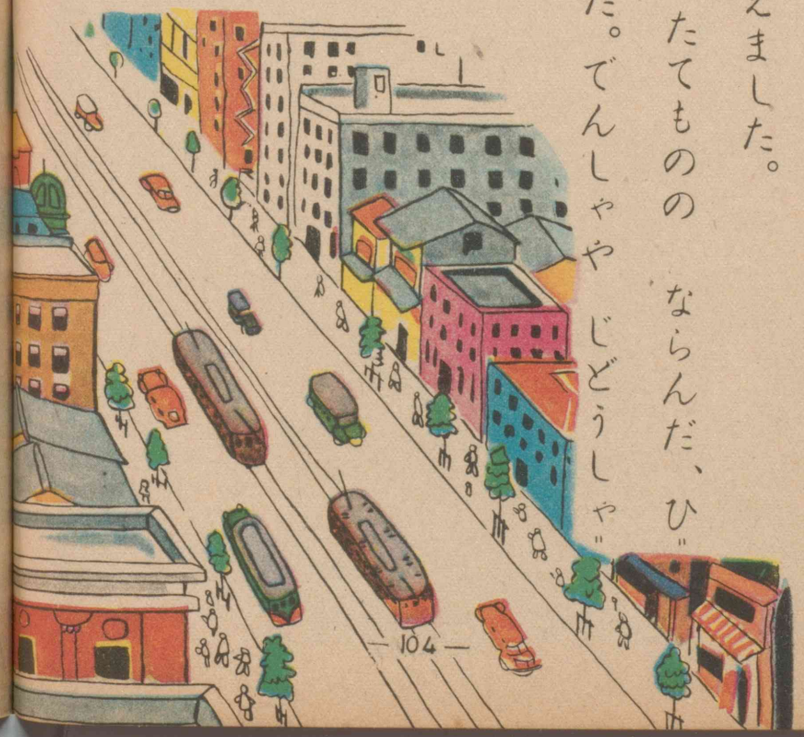
を　いくつも　かさねたような　高い　たてものが　あります。

「ほら、これが　五じゅうの　とうだ。」

と、おとうさんが　いいました。

おとうさんは、五じゅうの　とうの　まわりを、ぐるぐる　まわりました。しまいに、とうの　さきに　とまりました。子つばめたちも、かわるがわる　とうの　さきに　とまりました。そこからは、

町じゅうが　ひとめに　見えました。
こんどは、高い　大きな　たてものの　ならんだ、ひろい　とおりに　いきました。でんしゃや　じどうしゃが、たくさん　はしって　いました。
「でんせんが　いっぱい　はって　あるから、ひっかからないように。」
と、おとうさんが　いいました。

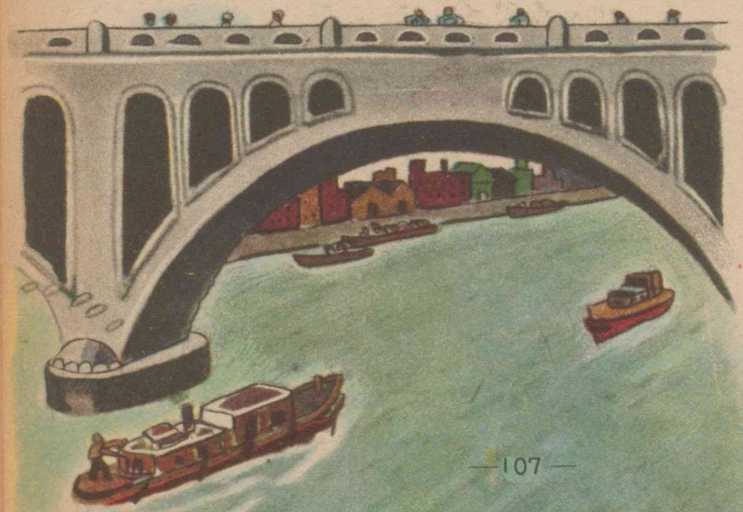


「はい。」
と、子つばめたちは　くちぐちに　いいました。
子つばめたちは、高い　たてものの　まどを　のぞきこむように　して　とびました。
「どの　まどの　中にも、にんげんが　いますね。」
と、子つばめたちは　おどろいて　いいました。
「じどうしゃと　きょうそうして　みよう。」
と、おとうさんが　いいました。
子つばめたちは、ずんずん　じどうしゃを　おいぬきました。

くろい　じどうしゃ、空いろの
じどうしゃ、チョコレートいろの
じどうしゃ、どれも、つばめたちに
かなうものは　ありませんでした。
子つばめたちは、わざと　じどうしゃ
の　やねと、すれすれに　とびました。

こんどは、今まで　見たことも　ないような、大きな
川へ　出ました。船が　いくそうも　とおって　いました。ポンポンと　けむりの　わを　はいて　すすむ　船が

あるので、子つばめたちは　びっくりしました。
大きな　はしも、いくつか　かかって　いました。
おとうさんは、
「あの　下を　くぐると、いい
ことが　ある。」
と　いいながら、はしの　下を
くぐりました。子つばめたちも
くぐりました。すこし　うすぐらい　はしの　下には、こまかな
虫が、たくさん　とんで　いました。



つばめたちは、それを　はらいっぱい　たべました。
てっきょうを、きしゃが　白い　けむりを　はいて
わたって　いきました。
「さあ、こんどは、てっきょうの　はしら"
の　あいだを、ぶっつからないように
とびぬけるのだよ。」
と、おとうさんが　いいました。
子つばめたちは、すばやく　とび"
ぬけました。見ると、おとうさん"
は、なんども　いったり　きたり

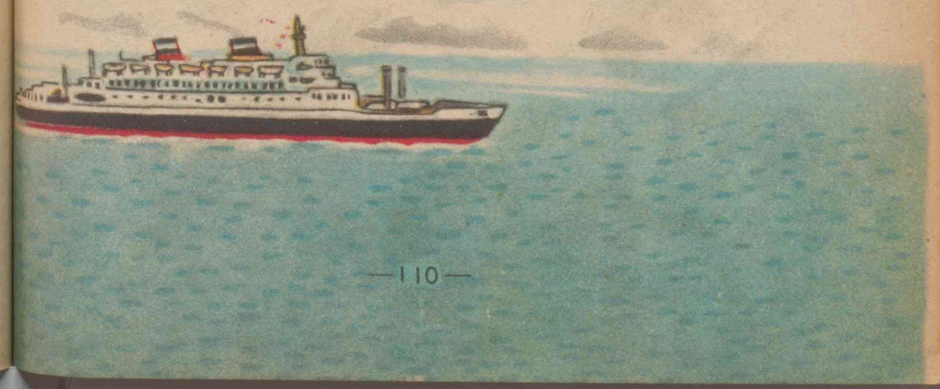
しながら、とびぬけて　います。
子つばめたちも、その　とおり"
に　しました。
「こんどは、いよいよ　海の
方へ　いくのだ。」
と、おとうさんは　いいました。
「海、海、うれしいなあ。」
と　子つばめたちは、げんきな
声を　あげました。
やがて　つばめたちは　みな"

とへ　きました。みなとには、いろいろな　船が　あつまって　いました。

「そら、あそこに、うごいて　いる　きせんが　あるね。あの　きせんまで　とぶのだ。」

と　おとうさんが　いいました。

それは、白く　ぬられた　大きな　きせんで、今、みなとを　出て　いこうとして　いました。高い　マストの　つなには、きれいな　はたが　ひらひら　して　いました。

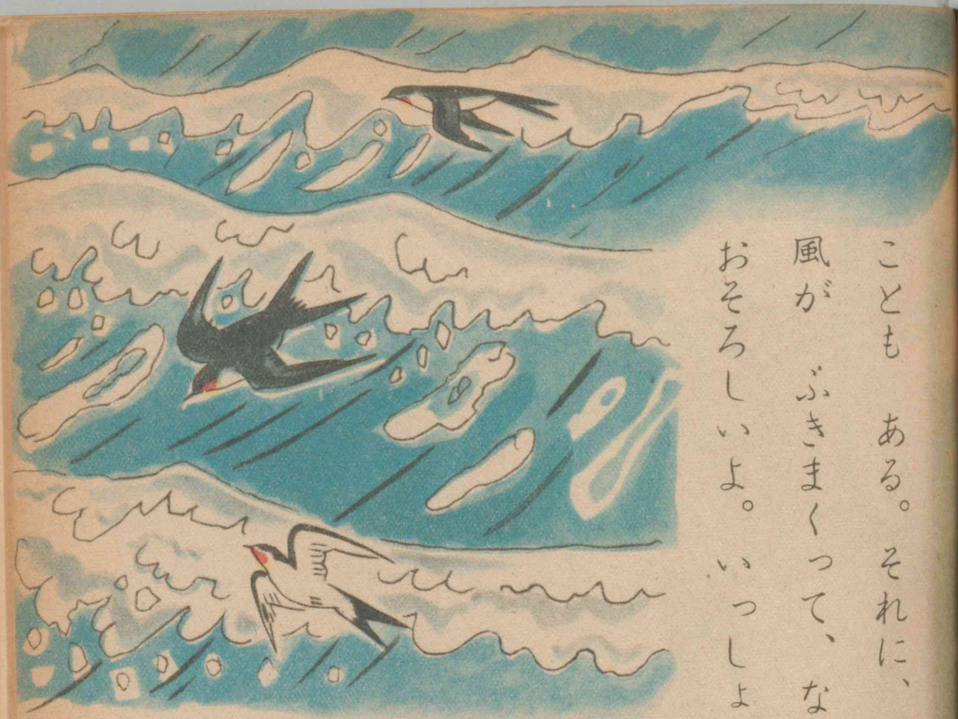


つばめたちは　マストの　つなに　とまりました。きせんは　ゆっくり　うごいて　いました。

「この　きせんは、みなみの　くにへ　いくのだよ。ごらん、海は　ひろいだろう。みなみの　くには、海の　ずっと　ずっと　むこうに　あるのだ。わたしたちも、もう　しばらく　したら、みんな　いっしょに、この　海を　わたって、みなみの　くにへ　いくのだ。」

と、おとうさんが いいました。
「みなみの くにですって。」
子つばめたちは、おどろいて おとうさんを 見ました。
「そうだよ。みなみの あたたかい くにへね。 でも、そこへ いくには、ひろい 海を、二日も 三日も、とびつづけなくては ならない。つかれて 海へ おちる

こともある。それに、雨が はげしく ふったり、風が ふきまくって、なみが 山のように なると おそろしいよ。いっしょに とんで いけるかな。」
と、おとうさんは、子つばめたちを 見ながら いいました。
「だいじょうぶです。」
と、子つばめたちは くちぐちに いいました。
「じつは、きょう みんなの



とびかたを　見て　あんしんしたよ。」
と、おとうさんは　いいました。
すると、一わの　子つばめが　いいました。
「では、もう　わたしたちの　生まれた　うちへは、かえって　こないのですか。」

「いや、らいねんの　春になったら、また　あのうちへ　かえって　くるのだ。みなみの　くにから　海を　わたってね。

さあ、きょうは　これで　かえろう。おかあさんが　まって　いるだろうから。」
おとうさんは　そう　いって、マストの　つなを　とびたちました。
きせんは、高く高く　きてきを　ならしながら、まっすぐに、青い　海へ　むかって　すすんで　いきました。
つばめたちは　さようならを　するように、きせんの上を　すれすれに　とびました。

七　わたくしの　けいこ

一　あたらしい　きょうしつ

二年生に　なると、うれしい　ことが、たくさん　あります。

○「みんなが　よんで　いる」の　ぶんは、よむ　人を　きめて、はっきりと　きれいな　声で　よみましょう。

「ながれる　おがわ」と「おがわが　ながれる」と　では、いいかたが　かわって　います。どちらが　ふつうの　いいかたですか。「みんなが　よんで　いる」の　ぶんの　中から、このような　ことばを　見つけ

て、いいかたを　かえて　ごらんなさい。

○　あなたの　きょうしつは、二年生に　なって、どんな　ところが　かわって　いますか。はなして　ごらんなさい。

○　どんな　ときに、むねが　すうっと　した　ことが　ありますか。はなして　ごらんなさい。

二　とけい

いろいろな　音や、ことばに　きを　つけると、おもしろい　ことが　見つかります。

○　あいこさんは、どんなに　して　とけいを　作りま
したか。はなして　ごらんなさい。

○　いろいろな　とけいの　音を、かたかなで　かいて
みましょう。音で、いろいろな　ことを　しらせて
いる　ものを、あつめて　かいて　みましょう。

○　(二)の、ふるい　とけいが　いった　ことばを　かき
ぬいて、それが、なんじごろ　いわれた　ことばか、
いって　ごらんなさい。

○　上から　よんでも、下から　よんでも、おなじ　こ
とばを　あつめて　あそびましょう。早口あそびや、

しりとりあそびも　して　ごらんなさい。

三　田うえ

ひろしさんの　うちでは、田うえを　しました。あな
たも、田うえを　見たり、おてつだいを　した　こと
が　ありますか。「田うえ」の　ぶんと　くらべて
おはなし　して　ごらんなさい。

○「さくらの　木の　下」と「牛」で、じっと　よく
見る　人は、どんな　ことを　見つけて　いますか。
いって　ごらんなさい。

○　ひろしさんは、たんぼで　なにを　見たでしょう。
くわしく　はなして　ごらんなさい。
●なえとりを　して　いる　人は、どんな　したくで
すか。
●人の　ほかに、なにが　どんな　ようすで　はたら
いて　いますか。
●どんなに　して　なえを　うえて　いますか。
○「子がえると　いね」で、子がえるは、どんな　こと
が　わかりましたか。おかあさんの　はなした　こと
ばを、かきぬいて　ごらんなさい。

四　白い　雲

見た　こと、きいた　こと、した　こと、思った　こ
とが、たくさん　かいて　あります。
○　あなたも、虫、草や　花、あそんだ　こと　などを
この　ぶんのように　かいて　ごらんなさい。
○　もし　白い　雲に　のったら、あなたは　どこへ
いきたいと　思いますか。思った　ことを、みんなで
はなしあって　ごらんなさい。

五　なつやすみ

きよしさんは、なつやすみの　えにっきを　かきました。

○　きよしさんの　えにっきには、どんな　ことが　かいて　ありますか。てんきは　どうですか。あなたも　なつやすみの　えにっきを　かきましょう。

○　きよしさんや　あいこさんは、どこへ　いきましたか。あなたも、どこかへ　いった　ことを、くわしく　おはなし　して　ごらんなさい。

六　海を　わたる　つばめ

子つばめは、町へ　いって、いろいろな　ものを　見ました。

○　つばめたちは、どんな　ものを　見ましたか。かいて　みましょう。

○　つばめたちが　とおった　ところを、かみしばいに　作って　おはなし　して　ごらんなさい。

○　つばめたちは、これから　どこへ　いくのでしょう。はなしあって　ごらんなさい。

あたらしいことば

あいさつ……13
あがる……7
あじ……98
あぜみち……49
あたたかい……112
あたり(あたる)……77
あつがみ……17
あぶない……101
あまのがわ……85
あまみず……66
(かな)あみ……86
あり……68
あわ(がいて)……49
あんしん……114
いく そうも……106
いた……86
いちじく……77
いっしょうけんめい……16
いっせい……53
いつつ……74
いつのまにか……14
いっぱい……51
いぬ(こや)……92
いね……60
いりぐち……101
え(木)……79
うぐいす……94
うけとめ(た)……15
うしろ……10
うすぐらい……46
うたれて(雨に)……66
うつくしい……72
うまく……62
うわぐつ……9
え(のながさ)……75
えらい……55
えんそく……30
えんとつ……102
おそい……34
おそろしい……113
おたまじゃくし……63
おとなしい……95
おどろいて……112
おやつ……37
かいば……96
かえろう……115
かきね……89
かくし(ました)……38
(いき)かけ(ました)……9
かげ……61
かご……49
かさ……50
かさね(た)……103
かすんで……53
かぞえ(たら)……74
かたつむり……99
かたまり(そう)……80
かなう……106
(ひと)かぶ……62
かべ……93
がまん……35
かみなり……66
(しお)から い……98
かるくて……89
かわるがわる……60
かんばん……84
きかい……28
きかんしゃ……26
きちんと……52
きつつき……43
きっと……74
きまりわるそう……38
きゅうな……32
きゅうり……87
ぎょうぎ……52
きり(が うごく)……94
きり(て あなをあける)……76
きり(のき)……65
きり(ました)……76
くぎ……86
くさむら……62
くずして……98
くちぐちに……105
くみたてる……76
くもり……86
(お)くれ……48
クレヨン……88
くわえて……68
けずって……76
げた(ぼこ)……9
けむり……102
こいで……90
こうさく……75
ごご……35
こしかけ……10
こしらえたり……98
五じゅうのとう……103
こたえ……21
こらえて(いきを)……62
(この)ごろ……29
こわがって……66
(だまり)こんで……34
さいレン……26
さかんに……65
さがし……75
さくひん……92
さくらい……46
さくらんぼ……46
さっそく……77
(めを)さまして……71
しおれて……73
しげった……46
じこく……23
しずかに……60
しずく……78
じつは……113
じどうしゃ……26
(まち)じゅう……104
じょうずに……13
しょうぼう……26
じょろ……74
しらせて……24
しるし……17
スイッチ……67
ずいぶん……95
すうっと……15
すがた……52
すき(をひいて)……49
スキー……83
すきとおる……80
すずしい……10
すすんで……90
すな……98
すばやく……108
すれすれ(に)……106
ずんずん……101
せい……91
せきたて(ました)……31
せっかく……98
せみのから……89
センチ……75
そうだん……11
だいじな……61
たからぶね……45
たけ(ぼうき)……75
だけ……48
たすき……50
たたいて……16
ただの……60
(おとを)たてて……24
たてもの……103
たなばた……85
たのもう……83
(その)たび(に)……34
だめだ……43
たよりに……101
たんざく……85
(いっ)たり(き)たり……108
ちかく……97
ちゃだんす……17
(お)ちゃわん……49
ちょうちょ……11
チョコレート……106
チョーク……11
ついた(って)……61
つかれて……112
つきぎり(ました)……102
つたって……101
つっこんで……96
つつ……76
つぼみ……70
つぼ(おおつぶ)……65
つめ……98
つゆ……5
つよい……65
てあう……69
ていねい……62
できごと……27
てっきょう……108
てつだって……18
でんせん……100
と(戸)……10
とうきょう……88
(おっしゃる)どおり……28
トタン(やね)……65
どて……57
とめる……18

なえ(なえどり)……50
(うえ)なおし……63 85
なかま……65
なきやみ(ました)……87
なす……92
なつやすみ……12
なのはな……49
なみだつ(おおなみ)……52 52
(土)ならし……34
ならんで……92 68
なります(ボンボンと)……25
にぎって……49 100
にっき(え)……45 86
にんげん……77 113
ぬいぐるみ……9 59
ぬられた……60 37
ぬりえ……62
ね(がつ〜)……104 104
ねそべったり……89 7
ねじ……91 61
ねらいうち……39 28
のこぎり……67 27
のぞいて……36 5
のびて……39 84
はいて(けむりを)……24
はえた……64 18
ばかり……16 50
はきかえる……76 97
はげしく……77 86
バケツ……45 77
はげます……34 49
はこにわ……92 68
はこんで……25 87
はじまり……6 18
はたらいて……13 90
はつでんしょ……39 113
はつゆめ……29 70
はったり……68 87
はなれた……6 18
はまべ……13 90
はめて……39 113
はやした……29 70
はらあて……68 87
はりがね……6 18
はる(かぜ)……13 90
はれ……39 113
ひがし……29 70
ひげ……68 87
ひとめに……104 104
ひっかからない……104 104
ひっついて……89 7
ひばり……91 61
ひまわり……7 89
(お)ひゃくしょうさん……61 91
ふうせん……84 39
ふしぎ(そう)……39 5
(こ)ぶな……5 36
ふみだい……36 27
ふるい……27 67
(こ)ぶり……67 28
ふん……28 38
へんに(きこえる)……38 69
(その)へん……69 24
ほかに……24 64
ほしもの……64 18
ほそい……18 13
ほめて……13 90
ボート……90 39
ほんとう……39 113
マスト……110 110
まっすぐ……110 115
まって……115 8
まど……8 77
まりなげ……77 15
みがかぬ……44 75
みずでっぽう……75 109
みなど……109 111
みなみ……111 61
みわたして……61 107
むこう……101 107
むし……107 102
めがけて……102 18
めざまし(のはり)……18 77
メートル……77 87
(なすを)もぎに……87 58
もぐりこんだ……58 92
もけい……92 9
もと……9 37
やおや……37 36
やがて……36 48
やかん……48 44
やきざかな……44 42
やどや……42 80
やわらか……80 64
ゆうだち……64 76
ゆるかった……76 28
よあけがた……28 30
よけい……30 28
よなか……28 59
よわい……59 114
らいねん……114 66
ラジオ……66 97
りょうし……97 32
るすばん……32 61
わざわざ……61 52
わざと……52 81
わた(がし)……81 47
わらぐつ……47 89
われて……89

五十おん

アイウエオ	ガギグゲゴ	キャキュキョ
カキクケコ	ザジズゼゾ	シャシュショ
サシスセソ	ダヂヅデド	チャチュチョ
タチツテト	バビブベボ	ニャニュニョ
ナニヌネノ	パピプペポ	ヒャヒュヒョ
ハヒフヘホ		ミャミュミョ
マミムメモ		リャリュリョ
ヤイユエヨ		ギャギュギョ
ラリルレロ		ジャジュジョ
ワヰウヱヲ		ヂャヂュヂョ
ン		ビャビュビョ
		ピャピュピョ

かんじ

私わたくし (4)　年ねん (4)　光ひかる (5)　見みる (9)　右みぎ (10)
戸と (10)　声こえ (13)　長ながい (18)　音おと (24)　目め (29)
早はやく (30)　門もん (35)　正しょう (45)　空そら (46)　口くち (47)
田た (48)　米こめ (61)　今いま (65)　雨あめ (65)　耳みみ (66)
方ほう (67)　思おもう (70)　竹たけ (75)　作つくる (77)　松まつ (78)
雲くも (80)　雪ゆき (80)　高たかい (80)　虫むし (87)　池いけ (90)
犬いぬ (92)　貝かい (93)　石いし (93)　海うみ (93)　赤あか (94)
谷たに (94)　草くさ (96)　船ふね (97)　村むら (100)　森もり (102)
風かぜ (113)　春はる (114)　青あお (115)

よみかえ

小お (5)　六むっつ (21)　生うまれる (28)　五いっつ (74)
人にん (55)　一日いちにち (86)　二日ふつか (87)

白い雲　しょうがくことば　二年上　（小学校国語科第二学年前期用）

昭和二十六年　月　日　印刷
昭和二十六年　月　日　発行　定価　金　円
（昭和二十五年八月十二日　文部省検定済）

著作者　大阪書籍国語編修委員会
代表者　重松鷹泰

発行者　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地　大阪書籍株式会社
代表者　松村九兵衛

印刷者　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地　大阪書籍株式会社
代表者　松村九兵衛

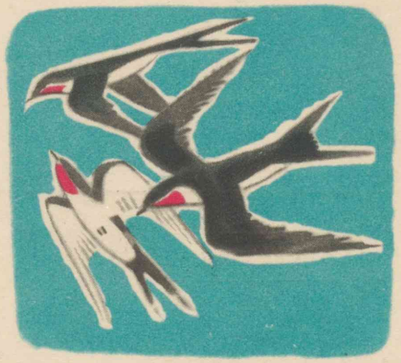
小国　229

発行所　大阪市西成区津守町東二丁目五二番地　大阪書籍株式会社

編修・執筆
奈良女子高等師範学校教諭　今井鑑三
同　笹倉美好
同　浜真喜男

監修
奈良女子高等師範学校教授
同附属小学校主事　重松鷹泰

挿画　西山英雄



広島大学図書
0130449885

大阪書籍株式会社